

令和 4 年 5 月 22 日現在

機関番号：37601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13077

研究課題名（和文）教育における対話実践の思想的検討ーローゼンツヴァイクを起源としてー

研究課題名（英文）An Examination of the History of Thought on Dialogic Practice in Education: With Rosenzweig as the Origin

研究代表者

田中 直美 (Tanaka, Naomi)

南九州大学・人間発達学部・講師

研究者番号：80807008

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：この研究では、ローゼンツヴァイクの思想における独自の対話概念を手がかりに、ユダヤ民族共同体に対する教育を捉え直した。その結果、ユダヤ人のための教育、すなわちユダヤ人の特殊性への回帰が、他の民族との対話への開放の可能性を含意していることを明らかになった。この成果は、ドイツ・ユダヤの対話思想の文脈における対話のあり方のみならず、ユダヤ民族ではない我々の教育実践における対話のあり方への知見を与えるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年教育の領域も含め、様々な水準での「対話」に社会的関心が高まっている。こうした中で、本研究はたんなる知識の伝達や合意形成とは異なる対話理論をローゼンツヴァイクの思想から示すことによって、対話のもつ現代的意義を理論的に模索する試みに一定の貢献を果たすものである。

研究成果の概要（英文）：This research project explores and reconsiders education for the Jewish community, referring to the unique concept of dialogue in Rosenzweig's thought. As its main outcome, this study found that education for Jewish people, that is, the return to the specificity of Jewish people, implies the possibility of opening up to dialogue with other people. The results here provide insights not only into the way of dialogue under the context of German-Jewish dialogue thought, but also into the way of dialogue in educational practice.

研究分野：教育学

キーワード：フランツ・ローゼンツヴァイク 対話 自由ユダヤ学舎 教育哲学

1. 研究開始当初の背景

中央教育審議会が平成20年1月に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を答申して以降、学校教育における言語活動への関心がこれまで以上に高まりをみせている。こうした動向に先立って、学校の教室における対話の理論的研究(例えば、O.F.Bollnow, *Sprache und Erziehung*, 1966.など)および実践的な試み(例えば、1960年代末にマシュー・リップマンによって開始された子どもの哲学(Philosophy for Children / Philosophy with Children)など)が蓄積されてきた。

このような試みは近年に至るまで実に多様であるが、それらに共通しているのは、「私」が積極的に対話に参加するという前提である。近年の試みで言えば、「多文化教育」や「シティズンシップ教育」などでも、異なる文化やコミュニティーの対話に主体的に参加したり関与したりすることが求められている(小玉重夫『シティズンシップの教育思想』2003年)。

しかし、言語活動への積極的な参加を促すことはよいが、今日ではそうした対話に参加できるのは、実際には声を発することのできる強者だけであることが問題視されている(広田照幸『教育』2009年)。他方で、対話とは異質な他者との対話であるという見方もある。たとえばブーバーやアレント、レヴィナスといったユダヤ思想家たちは、相手が自分と異なる他者であるからこそ対話する、他者との共有し得なさがあるからこそ対話するということの大切さを主張していた。近年ではそうした思想家たちの対話理論がいかに教育現場にも応用できるのかという研究もいくつかある(吉田敦彦『ブーバー対話論とホリスティック教育』2007年)。しかし彼らの対話思想も、いわば強い主体同士の対話理論に応用されているため、本当に「異質な他者との対話」になっていると言えるのか。というのも、異質な他者との対話においては「話す」ことよりもむしろ「聞く」ことのほうが重要になってくるのではないかと考えられるからである。そこで、「異質な他者との対話」を唱えたブーバーやレヴィナスが対話概念において多大な影響を受けたフランツ・ローゼンツヴァイクの思想に遡る必要がある。日本の教育学のなかで彼の思想はブーバーとともに紹介されるに留まっている(斎藤昭『ブーバー教育思想の研究』1993年)が、20世紀において対話思想の基盤を築いた最初の思想家がローゼンツヴァイクである(Casper, Bernhard, *Das dialogische Denken*, 2002)のだから、彼の対話思想を分析すれば後世の対話思想家たちが見落としていた対話の原理、すなわち「聞く」ということから対話のあり方を構想し直すことができるのではないか。そこで、本研究では、ローゼンツヴァイクの対話思想を明らかにすることに加えて、近代教育批判の系譜としてのヘブライズムの対話思想をローゼンツヴァイクまで遡って、彼を起点に位置づけ直すことで、対話にかんする教育思想史に新たな理論的・実践的なインプリケーションを示したいと考えた。

2. 研究の目的

以上のような背景のもとで、本研究では、教育における対話実践の理論を、フランツ・ローゼンツヴァイク(Franz Rosenzweig, 1886-1929)を起源として捉え直すことで、「聞く」という観点から対話のあり方を構想し直し、教育思想史に対話のあり方についての新たな理論的・実践的なインプリケーションを示すことを目的として設定した。検討に際しては、彼の教育論と翻訳論に含まれる対話思想を明らかにし、彼が創設し、教鞭をふるった自由ユダヤ学舎での教育実践を考察した。さらに、教育思想史のユダヤ思想の系譜の研究として、ハンナ・アレントやハンス・ヨナスらの思想の検討を進めるとともに、その思想系譜がいかに現代の教育実践において理論的な知見を提示することができるのかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究の遂行にあたって、主なリサーチ・クエスチョンを以下の三点に設定した。

RQ① 「対話」において見落とされているものがあるのではないか：近代教育批判として「対話」の重要性、とくに積極的に話すことの大切さが主張されるが、対話の原理を再考すれば、看過されているもの、すなわち「聞く」という観点の重要性が明らかになるのではないか。

RQ② 近代教育批判としての対話の源泉に遡る必要があるのではないか：近年注目されているブーバーやレヴィナスの対話理論に影響を与えたローゼンツヴァイクの思想の内実を明らかにし、彼の思想を起源とする対話思想として、後継の思想家たちを位置づけなおす必要があるのではないか。

RQ③ これまで注目されてこなかったユダヤ思想からどのような教育的示唆が得られるのか：ヘブライズムは近代教育思想のオルナタティブとしての思想系譜と位置付けられるが、これまでスポットを当てられなかったローゼンツヴァイクを起源とするヘブライズムの対話思想の系

譜から教育にインプリケーションを与えるものはなにか。

RQ①～③に通底して、主に二十世紀のドイツ・ユダヤの対話思想を対象とした文献研究によって研究を遂行する。一次文献としては、ローゼンツヴァイクの著『救済の星』に加え、対話や教育に言及した著作を主な検討対象とした。

RQ②に関しては、ローゼンツヴァイクの後継の思想家として、ハンナ・アーレントやハンス・ヨナスらの「対話」思想を検討対象とした。

4. 研究成果

先に挙げたリサーチ・クエスション①～④との対応において、本研究の成果をまとめるならば以下の通りである。

まず RQ②については、まずもってローゼンツヴァイクの思想の内実を明らかにするために、未邦訳の教育論をはじめとする彼の論文を中央大学の村岡晋一教授とともに邦訳し、ローゼンツヴァイクの思想を内在的に解釈することを試みた。なお、この翻訳は『新しい思考』と題し、論文集として法政大学出版局から出版されている。

次に RQ②および RQ①については、本研究では、特にローゼンツヴァイクの「祈り」の概念に着目することによって、徹底して「聞く」ことから開始される対話のあり方を明らかにすることを試みた。考察を通じて、「祈り」におけるユダヤ民族と神との対話と、人間同士の対話のあり方の相違が明らかになった。具体的な違いとして、一つは、神と私の対話において私はつねに呼びかける者で、神に応えられる者であるが、人間同士の対話においては呼びかける者と応答する者は双方向的であること。二つ目は、沈黙の仕方である。祈りに関しては私は完全に沈黙しなければならないが、人間同士の対話のばあいには、たしかに他者の発言を聞くために沈黙するが、私は他者と面と向かって居あわせているので、眼でも聞いている。それゆえたとえ黙って聞いていたとしても、その沈黙はなにかを語ってしまう。しかし、こうした違いがありながらも、対話相手からの応答という「未来」を待つことにおいて、私とは異なる他者に会うという点は共通しており、この「聞く」という態度、とりわけユダヤ民族の絶対的な他者としての神との対話において徹底して聞くという態度においてこそ、私が対話相手を把握しようと考えられるような対話や、私と対話相手以外を排除しようとするような対話を捉え直す契機が確認された。こうした研究の成果は、“Die Bedeutung von »Erlösung« in sozialer Dimension : Zur Akzeptanz des Rosenzweig-Gedankens in nichtjüdischen Kulturbereichen”と題した研究論文として公開されている。さらに、神とユダヤ民族との対話が、ユダヤ民族ではないわれわれ非ユダヤ民族同士の対話と比べてどのような特異性を持ち、また神とユダヤ民族との対話が、ユダヤ民族とわれわれ非ユダヤ民族との対話へと向かう方向性をなぜ持つのかということについての考察は、引き続きローゼンツヴァイクの内在的な思想の研究をおこなうこととした。こうした考察の成果は、現在研究論文として学会誌に投稿中である。

最後に RQ②および RQ③については、まず、収集した資料を踏まえ、ローゼンツヴァイクがフランクフルト・アム・マインに創設したユダヤ人のための教育機関である自由ユダヤ学舎の創設経緯を整理し、そこで対話実践の基盤となる対話理論を、彼の講義草稿から明らかにすることを試みた。こうした検討の成果は、現在研究論文として学会誌に投稿中である。次に、ローゼンツヴァイクの思想から、彼の後継の思想家たちの対話思想を思想史的に位置づけ直すために、マルティン・ブーバーやエマニュエル・レヴィナス、ハンナ・アーレントやハンス・ヨナスらの思想についての知見を深め、彼らの「対話」あるいは、彼らの思想において他者とはどのような存在なのかを明らかにすることを試みた。その成果の一端は、アーレントおよびヨナスの研究者と共に、「ヨナスとアーレント : 出生をめぐる思想と未来への責任」と題して学会にて口頭発表および研究論文として公開されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田中直美	4. 巻 29
2. 論文標題 ローゼンツヴァイク著/村岡晋一、田中直美訳『新しい思考』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 244,247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Tanaka	4. 巻 12
2. 論文標題 Die Bedeutung von >Erlösung< in sozialer Dimension :Zur Akzeptanz des Rosenzweig-Gedankens in nichtjüdischen Kulturbereichen	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Rosenzweig Jahrbuch	6. 最初と最後の頁 142-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸谷 洋志 , 石神 真悠子 , 田中 智輝 , 田中 直美 , 村松 灯	4. 巻 29
2. 論文標題 コロキウム ヨナスとアレント : 出生をめぐる思想と未来への責任	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 石神真悠子 , 戸谷洋志 , 田中智輝 , 田中直美 , 村松 灯
2. 発表標題 ヨナスとアレントー出生をめぐる思想と未来への責任
3. 学会等名 教育思想史学会第29回大会コロキウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naomi Tanaka
2. 発表標題 Die Bedeutung von "Erlösung" in sozialer Dimension
3. 学会等名 Internationale Rosenzweig Gesellschaft (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 フランツ・ローゼンツヴァイク、村岡 晋一、田中 直美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 518
3. 書名 新しい思考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------